
 学 会 記 事

 新潟麻醉懇話会
 創立20周年記念特別例会

日 時 平成6年12月17日(土)
 午後1時
 会 場 有壬記念館2階

I. 一般演題

1) 術前より血糖管理に難渋した小児 IDDM
 の1症例

大橋さとみ・富士原秀善(新潟大学麻醉科)

症例は14歳, 女性. IDDM で, 5歳からインスリン皮下注を開始. 今回, コントロール不良となり, 皮下インスリン分解症候群が疑われ, インスリン腹腔内投与のリザーバー埋め込み術が, 予定された. 術前より速効型インスリンの持続静脈内投与でも, 低血糖, 高血糖を繰り返していた. 麻酔導入はサイアミラル, 維持は笑気一酸素-セボフルレンと1%メピバカインによる硬膜外麻酔で行った. 導入後の採血で著明な低血糖を認めた. ブドウ糖投与で血糖は回復, 術中は問題なく, 術後の覚醒も良好だった. 本症候群は, インスリンが皮下組織で分解され皮下注に抵抗状態となるもので, 静脈内投与は有効であり, 本邦では2例の報告がある. 本症例では導入前の血糖測定や患者の注意深い観察が必要であったと思われる.

2) エチレングリコール(アイスノン®)中毒

本多 忠幸・本間 富彦
 渋江 智栄子・油井 勝彦 (新潟市民病院)
 遠藤 裕 (麻醉科)
 吉田 和清 (同腎・膠原病科)

エチレングリコール(EG)急性中毒の治療経験を報告した. 症例は, 31才の男性で, 分裂病の診断を受けていた. 隔離室に入院中, 自殺企図にてアイスノン®を約半分を服用した. 来院時, 意識障害と著明な代謝性アシドーシスをきたしていた. EG中毒の治療としてエタノール持続投与と血液透析を行った. 代謝性アシドーシスは改善し, EGの血中濃度もほぼ0mg/dlとなった. し

かし, クレアチニンが上昇し, 非乏尿性急性腎不全を発症した. 腎不全は, 輸液療法などで改善し, 第17病日後に転院した. EG中毒の病態把握には, base excess や anion gap が, 有用であった. 我々が検索したところ, アイスノン®によるEG中毒の報告は, 本邦において未だかつてない.

3) ラリンジアルマスクに気管支ファイバーを併用して気管内挿管した3症例

傳田 定平 (新潟大学麻醉科)
 山際 浩史・北原 泰 (竹田総合病院)
 遠山 誠 (麻醉科)
 国分誠一郎 (新潟県立がんセンター麻醉科)
 河野 達郎 (新潟県立新発田病院麻醉科)

新しい気道確保の方法としてラリンジアルマスクが広く用いられており, 又挿管困難症例でも比較的容易に気道確保が可能であるが, 頭頸部, 口腔内の手術や長時間の人工呼吸管理には適さないこと, 誤嚥の可能性や胃管が挿入しにくい等欠点も少なくない. 一方, 最近ではラリンジアルマスクに気管支ファイバーを併用し気管内挿管する方法が報告されている. 歯牙異常, 頸部皮膚癒痕拘縮, 小顎, 巨舌, 頸椎可動制限等挿管困難が予想される因子が存在する場合, 開口が可能でありラリンジアルマスクが挿入できれば気管支ファイバーを併用することにより速やかに経口挿管ができる. しかし, 巨大な喉頭蓋等, ラリンジアルマスクの装着性に乏しい可能性のある場合気管支ファイバー併用による経口挿管は困難なためラリンジアルマスクを適正な位置に矯正するか, その他の気管内挿管の方法を考えたほうが良い.

4) 最近のラリンジアルマスクの使用経験

市川 高夫・山浦 昌史(済生会第二病院) 麻醉科

我々は, 1994年春より, 従来の標準型とともに reinforced ラリンジアルマスク(以後, 強化型 LM と記す)を使用し, 非常に有用である感触を得たので若干の考察とともに報告する.

強化型 LM の特徴として, ① 頭部・頸部・肩・上腕の手術時に有用である(主に眼科, 整形外科, および耳鼻科, 脳外科の一部など). ② 口腔内と咽頭の手術時漏れや分泌なしで手術可能(歯科, 耳鼻科の一部). ③